



世田谷区で「農あるまちづくり講座」N世

田谷を開講中だ。3月から6月まで、第二、第四次曜日の午後7時から8時半まで、消費者・市民を対象に農業やまちづくりに関係した講義を行い、残った時間で質疑や意見交換を行っている。

主催は都市農業研究会。川崎平右衛門顕彰会らカーブスコープ連合会東京中央事業本部が共催。世田谷区とJA東京中央、JA世田谷自農が後援している。江戸時代中期に武蔵野新田開発を協同の力を発揮させることにより成功に導いた立役者が府中出身で名士の川崎平右衛門。新田開発が行われた地を移動しながら毎年ブエスタを開催しているのが川崎平右衛門顕彰会だ。

一昨年11月、小平市で開かれたブエスタの閉会挨拶に立ったのが顕彰会会長・山田俊男参議院議員であるが、山田会長は挨拶で自分の参議院議員として残された任期は都市農業の振興に全力投球したい旨を語られた。終わってから参議院の席で、山田会長に都市農業の振興と書いて、具体的に何をやるのか、とホッルを投げたのが

ワーカーズコープ連合会グループの日本社会連帯機構の永戸佑三理事長。そこの喧々譁々の議論の末立ち上げたのが都市農業研究会で、開始したが「農あるまちづくり講座」となる。昨年9月にまず西東京市でスタート。6カ月にわたり、平日の午前中、12回の講義を行

協同組合間連携で「農あるまちづくり講座」

った。西東京市の都市計画、そこの農地の位置づけなり現状、都市農業の実情、市民の農業活動、農業実践の基礎知識等。17名が参加。講師は基本的に地元で活躍している方々。会場はJA東京女らしいの保谷支店会議室。ここでの試行・経験を踏まえて第二として世田谷区で行っているもので、現役世代が参加できるよう時間帯を平日の夜に変更。会場はJA世田谷自農のファーマーズセンターの会議室。講義の中

の「せだがやえたち」の取組展開と農業の実情、そして農業実践の基礎知識については、JA東京中央が担当。また世田谷に本部がある生活クラブのメンバー数名も愛護生として参加。まさにJAとカーブスコープを中心に生協も含めた協同組合間連携によって「農あるまちづくり講座」は展開されている。

定員20名に対し29名の申込があったところから募集を打ち切ったのが実情で、予想以上の区。女性が3分の2を占めると同時に、ハイキャリアの女性もかなり混じっているように、男性も含めて農業についての関心や思いは強く、熱い意見が飛び交う。そして講義を受けて知識を得るだけでなく、実際に自らも農業をやりたい、ライフスタイルのなかで農業を取り込みたい、という人も多く、時代の流れを実感する。

こうした活動が可能なのは都市農地があつてこそ、とりあえず2022年問題からはクリアしたものの、次の10年先には都市農地売却の勢いが強まることは必至だ。情勢・環境は都市農地の半永久的保全措置の創出、そして揺るぐ食料安全保障を支えていくための地域自給度アップを求めている。講座を開催する中で、都市農地の半永久的保全のための提言・運動展開や首都圏での地域自給圏づくりという次の課題、ステップが見え始めている。

(農的社會学サイエンス研究所代表)